

日立研究所30年記念に就て

油挿し落穂拾い主人 空 尽 記

1. 緒 言

日立製作所は1910年の創設で今や54年を経たので既に半世紀を超えている。今回大甕丘上に豪壮なる研究所舎屋を完成し日立港を脚下に踏まへ、太平洋を一望に納め、対岸米大陸を向こうに廻わし、幾多の俊英を抱え邦家の為日夜研究に尽瘁せられて居る事は寔に慶賀の至りとする。老油挿しは一本槍式の一生で当研究所創建期に浅からざる因縁を結んで現時に至る今生き残りの1人として30年記念に際し何か書くべしとの依頼を受けた。御尤な話ではあるが歳月重なり過ぎ今や鴛馬の安歩を落穂拾いに差向け大転向の事とて朦朧たる想念では謬りを伝える恐れ尠なからず一応は断わったのであった。されど今日の躍進を感得祝賀す可きは当然で亦歎びを衆と共にすべきであるとも考えられ、大変人ながら所謂驥尾に付し聊か追憶の世迷い言を述べさせて頂く次第である。

2. 日立研究所の略歴

日立製作所創立の始め頃は後年人々の考える程明朗順調なるものではなく、志丈は竹内維彦、小平浪平氏等より頗る遠大の企図を打込まれたものの、事は蹉跎の連続



であった。此の蹉跎の連続にも翻意せしめず能く忍耐貫徹をプッシュされたるは初代社長の小平さんの大徳であった。是等の歴史は別に詳しいが蹉跎計りでは困るので、試験研究、試作等を重要義とし扱う可きであるとは大正の差入り初期に方針は定められた。人数少なく初めは設計、製造、販売3部面で、其設計という片隅みに試作研究というのを考えて居た。それが老油挿し若かりし時代に其3分の1を担当させられて居た。大正7年頃製作品の販売に大仕掛けに乗り出したので試験課の中に研究係を設けた。研究の独立専門化は其頃である。恰も日立評論の起源と同じであったろう。故に日立評論の巻数は正に日立研究所の歳数である。(現在46巻である)。当初携われるは前橋俊一、大河内重助、秦常造、和島藤助等の人々であったろう。大正7年(1919年)職制の制定があり、当時は第1次世界大戦直後だった。昭和9年3月(1934年)研究所に昇格した。其初代所長に老油挿しの前身が宛てられたのだった。昭和17年東京に中央研究所が出来たと思うが日立研究所は8年の年長で、兄分である。

3. 油挿しと研究との関係

日立に於て「失敗を教訓とする」主義は大体大正の初期からで1915、6年頃から終始一貫した一本槍方式である。失敗してから学ぶのは時間的位相は遅相で失敗を未然に防遏すべきであるというのが試作とか研究とかの重要義であるからそれを独立自存主義の日立では早くより重視し前述の如く進展して来た。油挿し個人の話は恐縮であるが人生は古来60年1世紀式で30年父子相重なる2本燃り縄式とあるのを欲張って75年即ち25年3本燃りが良いと考え25年3段の目論見とした。第1段は脛かじり期、第2段は稼働、第3段守成期、と思って居る。1910~1935年が油挿し其第2段で研究所長拝命は第3段の初めに当って居た。此第3段は主として研究に参与する運命に相成った。1960年で終結の順序であった。第2次大敗戦が其間にあるので追放もあり第3段計画は画餅となった。

1951年再役は最早老老、前進猪突の研究に不適とし油挿しに転出し1955年退役後も油挿し落穂拾いに専従して居る。故に第3段の部は約20年位が人の養成、後20年位が落穂拾い、但し拾余年の転換重畳期を為して居る。是故に研究専従は遠く以前に足を洗って居るので一応は断わったのであった。例えば日立評論は創刊より約40巻は努力したが此6年間は油挿し論集7巻70冊に傾倒して他を顧みないで来たのである。

研究に参与する奇縁は浅いとはいえないが、人の養成

も昭和28年(1953年)変人会(現返仁会)設定で一先づピリオドを打ったと思って居る。1962, 3年にもなると流石に人生余分の末段, 必然的に自ら聳瞽化して来たのを自覚する。

4. 研究に対する希望

昭和5年(1930年)稼働期末段で「発明と発見」という本を書いた。名称は異なるが大体として研究に関する当時の考えで稍著しく水戸学学風になって居る。けれど其後の34年間の日立及び全日本の研究の動向は概ね全体として相似た方向にはなっているかと眺めて居る。其間第2次大敗戦を経て約20年間弱は大なる道草喰いがあった。其の間の顕著なる意見の研究は個人単独行よりも総合協同方式でなければならないとか、投資家と研究者との関係とか、致知格物論は深山未踏の新道開拓の如く心得べしとかいう事は広く知れ渉り皆その觀念に準拠する傾向にあると見られる。最近現橋本重役は時言とし伊賀焼なる一論を提唱して居るのは最もよく研究従事者の道標を示して居ると信ずる。昭和9年研究所と銘を打ってから現在まで正に30年ではあるが大敗戦の道草喰いと終戦期の混沌時で大半は空費され昭和26年(1951年)頃より稍本式に研究所として稼働したであろう。正味は僅かに14, 5年来で今日の隆盛を賁したる各位の御努力には敬意を表するに吝ではない。吾々の製品も漸く世界の各方面に進出するの機運に到達したと少しは悦ぶ可きかと思つた途端に世界的に自由経済通商となって来た。是は結論として我邦として科学技術面の研究に対し必然的に独立自存主義を強制するものである。

吾々は多少邦内に於ては該主義の覚悟を先行はして居たけれど益々重負荷を加えられ聊かも安息を許されない状態であろう。之を邦内に觀ても邦人一流の附和雷同性の致す関係もあるのか中央研究所と名付くる研究施設は雨後の筍然として全国に澎湃として勃興した。故にオリンピック競技に似た要領を以て研究競技の猛烈なる訓練

があつて欲しい。旁々眼を欧米ソ等に向け邦内に於ける無益の摩擦に精力を損ずるなかる可きを思う。油挿し転出後の聳瞽老人では其前面の何れの方角を撰定すべきやの知見を欠き方向指示は相叶はぬものである。されど迷路に彷徨せし経歴上岐路に道標を設置せねばならないとし落穂宗とし貧弱なる油挿し論に没頭している。日外論述したのであるが研究の要義は、学、問、思、弁、行なる5段階を、学、問、行、思、弁、及断と6段に考えられたいと念じて居る。研究というは其行に相当する業務に甚しく重点がある。何故に行を繰上げるかという日本人の通弊性向として薄く行つたものを自ら篤く之を行つたと感違いし易い。篤く之を行ふというのは本来哲学的の辞ではあるが研究では致知格物論とし事を慎重綿密に為すに当る。然も思、弁、断は他人と協同せねば出来ない社会に相成つて居る。故に後の3段に於て薄いものを篤いと伝えと全体として完璧になりかねる。数年も以前に強く要望したものであつたが未だ思想の動向は拝米心酔と合流し独立自存の大方針に礙げをなすらしく感ずるので敢て繰返し切に希望する。迷路に踏み入れるを注意されたるに対する自己反省力即内省の猛練習である。

是を總括的に見て格物一辺倒では全きを得ないから人として捨賈執真を望むという事で、心の状態を易象艮とか兌とかくつつけた恨とか悦とかにウロウロせず心は唯一心不乱に真にくつつけ之を慎という処へ落付くべしという希望である。研究に於ては艮兌はなくとも真は要なのであるから慎む一辺倒を可とする。一般に当研究所に於て勤勉努力は人後に落ちてはいないと信ずる。是は老油挿しの深く謝意を有する処であり永くその伝統維持を熱望すると共に心の本体確立に一段の工夫を致されん事を切望します。

幾久しく益々繁昌すべきであるから2, 3の妄言を以て30年記念に祝意の微衷を呈す。

1964年8月30日記

(日立製作所顧問)